

「具体的操作期」前後の抽象的意識から具体的意識へ導く指導の模索  
—小4から中1を対象にした合わせる活動に関する調査にもとづいて—

教育学研究科 芸術教育専攻 音楽科教育学領域 小野 志織

学校教育で行われる音楽活動はアンサンブルが多い。指導の際も「合わせて」と声をかける場面をよく見かける。しかし、「合わせる」という言葉は、非常に抽象的な言葉である。子供達がアンサンブル活動をする中で、この指導言は効果的であるのか疑問に思ったことが本研究に取り組むきっかけとなった。

日本の学校教育では「生きる力」を教育目標に掲げ、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにすることが求められている。つまり、単に知識・技能がどう役に立つかということだけではなく、教科等の学習活動を通じて、どういう力が育ち、何ができるようになるか、ということまで見越した指導の必要性が謳われ、子供一人ひとりの自律を促すことが学校教育全体を通じて重要視されているのである。そのため音楽科では「自己調整力を持ち、音楽的に自律し続ける子供」を目指し、活動を行っていくことが重要であると筆者は考える。

本研究では10歳前後の子供に焦点を合わせている。その理由としては、主に認知と運動機能の発達に基づく。音楽的に合わせるということについて子どもたちがどのように捉えているのか現状を把握するため、「具体的操作期」を迎えた10歳前後の子供を対象に質問紙による意識調査を行った結果、小学生では学年ごとの差はあまりなく「合わせる」活動に対して抽象的に捉えていることや、小学校6年生と中学校1年生の間で意識の差が大きいという結果を得た。調査協力者の児童・生徒は既に「具体的操作期」に差し掛かっているとはいえ、小学4年生から6年生では結果に顕著な違いが見られなかったことから、まだ小学生は「反射的な反応」であったり、「なんとなく合わせる」という曖昧な認識に止まっていたりすると考えられる。表面的に「合わせる」という活動だけを繰り返すのではなく、指導者には「何を、どのように」という具体的指示を伴った活動を積み重ねを通して、子供達を「意図と意識を伴った“合わせる”」へ導くことや、子供達の中で意識の変容を促すことが求められる。この結果を踏まえた上で、音楽的に「意図と意識を伴って“合わせる”」という認識をどう育てていくか、具体的な指導法に下ろしながら具現化し、提案を行う。

今後は本研究で取り扱わなかった「合わせる」以外の認識についても検証し、音楽的な自律についての意識をどう育てていくか考えていきたい。